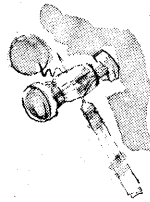


## 「幼児教育の源流」(Ⅷ)

### ロバート・オウエンの幼児教育思想〈その一〉



山根 祥雄

はじめに

過去の偉大な思想家が、魅力あるもの・学ぶべきものとなつてよみがえってくるのは、偉人の生きざま、思想形成、実践などが私たちの教育活動をはぐくむエネルギーを与えてくれるからにちがいない。本稿で筆者がオウエンの幼児教育思想に学びたいと思う視点は、大きくいって、次の二点にある。

まず第一点。世界の幼児教育施設の創始者の一人にあげられるオウエンが、幼児教育をどのようにとらえていたかということ、いいかえると、かれが幼児教育を重視した要因というものを探ること。さらに第二点として、かれの幼児教育思想がどの

ように形成され、どのように実践され、深められていったのかを探ってみること。以上の二点である。

本稿ではオウエンの思想を生きわよくまとめるというよりも、むしろかれの生涯を素描する方法をとってみたいと思う。かれの幼児教育思想の展開は、かれの思想一般の軌跡と不可分であると考えられるからである。

#### 幼年時代

世界の、とくに英国の幼児教育を創ってきた人びとの一人であるオウエンが、どのような幼年期を過ごしたのかということ、ときほぐしたい一つの題目である。

オウエンは、一七七一年、北ウエールズ、モンゴメリシャーのニウタウンで生まれた。ニウタウンは当時人口千人あまり、こざっぱりした田舎町であった。父は金物商をかねた馬具商であり、郵便便長であった。

オウエンの性格形成に影響を残したのは熱いフラムマリを飲んだ事件である。そのため内臓をいため、以後かれは食物は簡単なものをごく少量しか食べることができなくなった。しかしこの体験によって、食物の身体に及ぼす影響についていつも注意を怠らないようになり、物ごとを精密に観察し、始終ものを考える習慣ができた、とかれは述懐する。

オウエンは四、五歳のころ、小学校へ通学していた。活発でダンスや音楽も得意であった。当時は、流暢に読め、はっきり書け、算術の四則を解すれば、ひとかどの教育をうけたものとされていた。またこの初歩的な程度の教育が人を教えることの資格とされていた。かれは賢くて、教師の教えるものすべてを学んだといわれ、七歳以降助手教師として二年をすごした。またかれは読書好きな少年であった。牧師、医師、弁護士などから書物を借り、文芸書、歴史、旅行記を読みこなしたといわれる。かれの述懐によればすでに十歳までに、宗教というものもの誤りについて確信したという。

以上のようにオウエンは、読書好きで活発な子どもであったことがわかる。さらに、ダンスの相手をめぐっての競争、虚栄、嫉妬、憎悪などをみてとっていたこと、また両親からただ一度受けた折かんににおいて、罰の無益さあるいは有害さに気づいていたことなどは、後年のオウエンのへんりんがあらわれているといつてはいいすぎであろうか。

### 少年時代

オウエンは、近所の人の商売を一年間手伝った後、田舎町の生活にあきたらず、兄をたよってロンドンに行く。しばらくして、マクガフォッグのもとに店員としておかれた。オウエンはこの実直な実務家の信用をえて、商売のひとつおりを手ほどきされた。店舗に出入する人びとの性格を観察したり、精緻な織物商品に対する細心な心くばりを学んだりした。またオウエンは、一日の労働の前後、公園での散歩、読書、思索、研究をおこたらなかつた。

オウエン十四歳のとき、フリント・パーマ商会に職をえている。この店は風変わりで安いので、商売の回転が早く、仕事は多忙であった。オウエンは貧しい人びとの生活に親しみ、まもなくマンチェスターのサターフィールド商会に就職する。はぶ

りのよい経営上手なこの小売店で、かれは中流階級の人びとと交わった。

こうした仕事についての知識、たとえば、商売の方法、織物の扱い方と識別、さらには読書にあけくれする生活は、オウエンの少年期（十―十三歳）における、いわば修業時代といつてよいであろう。

### 青年時代

オウエンはやがて、ジョーンズという職工と共同出資で仕事を始めるが、すぐにかれにみきりをつけ、新しく紡績操業を開始する。ちょうど、マンチェスターのドリンクウォーターが支配人を募集しており、オウエンは名のり出て工場と五百人ほどの職工の管理をまかされ、年間三百ポンドの契約が成立する。

二十歳にも満たないオウエンには自信はなかったが、例の入念さで作業を調べあげ、工程を改善した。工場管理はスムーズにいった。オウエンはこれまでの体験から業務を熟知していただけでなく、かれの深い人間洞察力によって人びとの信任をえ、工場内の労働者の規律や訓練はすぐれた成果をあげた。かれはすでに宗教の偏見や常識を克服する過程において、人間形成への洞察をもちはじめていたのである。つまり、人間はその組織

と自然や社会にかこまれている状態との必然的な成果である、という人間性の知識から、他人に対する憤りや悪意は影をひそめ、他人の感情・思想・行動に対して同情すら覚えるようになっていた。オウエンは「生ける機械」としての労働者の状態改善にも気を配り、製品の品質も向上し、細糸の製造業者としての評判があがった。かれは名士の仲間入りをし、「マンチェスター文学哲学会」の会員とも交わる。ここでかれはいわゆる優れた教育を受けた人びとの教養のあやまりにも気づいていくのである。

こうして、ドリンクウォーター工場管理人時代の体験は、やがてニュー・ラナークの実践へと継承されるのであるが、そのころオウエンは、勤勉な人間的で進取な若手織物経営者としての手腕を発揮している。そしてドリンクウォーターとの訣別がまもなくやって来る（一七九四、五年）。

オウエンはついで、マースランドからの共同経営の申し込みによって、工場を始める。そのとき新たな協定がまとまって、「ウォルストン・カンパニーゴルトン紡績会社」の管理をひきうける。操業開始は、ドリンクウォーターのもとを去って、二、三年後のことであった。この紡績工場は着々と盛んになっていった。やがてオウエンはグラスゴーの取引先でデール嬢と出会う。

後のオウエン夫人であるが、かの女との結婚を思案中、おりしも父のデールによってすでに一七八五年操業開始のニュー・ラナーク工場が売りに出ていることを知り、かねて入手の希望をもっていたオウエンは、工場の譲渡を申し出る。やがてオウエンら三人の合資者は、六万ポンドでデール所有のニュー・ラナーク工場を買いとる（一七九七年夏）。二人の合資者の同意をとりつけ、オウエンはニュー・ラナークの「統治」<sup>ガバナンス</sup>（かれ自身のことば）に着手するのである。一八〇〇年一月、オウエン二十九歳のときであった。

## ニュー・ラナーク統治

以上のように、オウエンがめまぐるしく出資者と離合集散を重ねる過程に、またかれの木綿製造の品質向上と量産化の営みのなかに、木綿工業を中心とするイギリス産業革命の進行が如実に物語られている。

幅広い体験とみずからの洞察によって、オウエンのなかで構築された原理は、「人間の性格はかれのために形成されるのであって、かれによって形成されるのではない」というものである。この人間の性格形成原理は、環境万能論と極言しなくとも、かれの行動実践原理である。

オウエンによれば、現在人びとが無批判に伝授されている誤った観念から必然的に起こってくる諸結果は無知、罪悪、不幸であり、慈善、正義、道徳の原理を破壊させるものである。そして世の中は不調和、競争、戦争、全般の不合理な行為がうずまいている。

オウエンは環境性格形成論に立つて、ニュー・ラナークの統治にとりかかる。それは、利己的な制度の打用ではなく、ドリントウオーター工場で成功をおさめた、労働者の改善を中枢とする方式を深化徹底させるころみであった。人間の性格に犯罪を醸成させる傾向のある諸環境を除去し、秩序、規律、節制、勤勉の習慣形成に適当な環境を設定することであった。ここには資本主義化に対する積極的な対決というよりは、むしろ開明的な工場主としてのオウエンの姿勢がみとれる。

ニュー・ラナークには悪状態がまんえんしていた。この悪環境は、村民に影を落とし、かれらの性格や行動をゆがめていた。大多数の人びとは、怠惰、のんだくれ、うそつき、不誠実、偽善心であり、窃盗を働くものも少なくなかった。

こうした状態のニュー・ラナーク全体の人びとの改造をはかるくわだては、人間性格の中に犯罪をつくりだす環境を除去することであり、秩序、規律、節制、勤勉の習慣形成に適する環

境を設定することである。そのいみでニュー・ラナークの構想は、人間性に関する正確な知識にもとづく真理と慈しみと愛とによってささえられるべき、社会改良をめざす一大実験であった。

さて、当時ニュー・ラナークには、約千三百人が居住しており、四、五百名の貧しい教区徒弟がいた。この子どもたちは、すでにデールによって、衣服・食物が与えられ、さらに読み、書き（ただし年長のもの）が教えられていた。教師はよい人であったが、旧式の教授法であつて、かれらを苦しめるだけで効果があがらなかつた。かれらの教育は昼間の労働が終わつてからのことであつたし、教育のための費用ねんしゅつのために子弟の若年労働も不可避であつた。そのため子どもは、発育不良、不具、逃亡という結果を招いていた。以上がデールの児童対策の失敗の原因であつた。(1)

そこでオウエンのとつた方針は、公立慈善院からの徒弟の廃止、十歳に達するまでの子どもの健康と教育に留意して小児の雇用を廃止した。しかしニュー・ラナークはスコットランドに位置しているので、村人にはオウエンに対する他国人感情があつた。オウエンは村人の偏見による反感と非行をのりこえて、まず、刑罰を廃止し、不和・口論に対しては格言とルールを用

い、村民相互間のしつとには特権廃止、両性間の不規律交渉には罰金などの抑制案、予防規則などの指示・処置を施した。さらにオウエンは、サイレント・モニターという操業簿を考案し、道具改良、工場内改造、住宅の改築など、労働者の福利をはかつた。注目すべきことには、村民の便益として必要な食物や衣類などの一切の商品を共同購入し、原価で供給するようなシステムをとつた。あるいは、労災者や老齢者のための救済基金も設けた。

オウエンにとつては、工場労働者である村人の生活改善と、子弟の教育による村の改造とは、村ごとの改革という同一の地平の上にあつたのである。ここに「新性格形成学院」（以下新学院と省略）の発想が生まれる。住宅の狭さあるいは不設備は、親にも子どもにも有害であり、幼児たちの訓練に不適である。ここに、ニュー・ラナークの青年たちの性格を最も幼い時から成人になるまで十分に形成する設備が不可欠であり、親の手から離れるそもそもの幼少期から、性格形成の眞の原理にもついた施設が必要であつた。諸状態を創り、組合わせて、人間性の一切の性能・性向・能力をしかるべく練磨し、それらの一切を使って各性能各性向を規則正しく節制する習慣がつくようにと訓練し、よつてもつて人びとが教育されうる時——その時、

しかもただその時のみこそ、人びとは万人のためのよき、価値ある、優れた性格を形成し、ないしは人を合理的な存在となるように訓練する方法を知るのである。

このように子どもたちを悪い状態からよりよき状態におき、幼児から青少年までの合理的な新しい性格を形成するための、幼児学校その他の学校設置のとりくみをオウエンは着手し始める。しかしながらオウエンの偉大な構想を実施するには多くの障害があった。まず建物の建造・設備などに費用がけっこうかかるものであるし、親の偏見もある。さらに五人からなる新合資者のうちには、オウエンの構想に不賛成なものもいた。これは、一八〇九年のあのグラスゴーでの競売事件に象徴されている。オウエンの積極的な働きかけによって、ついに一八四四年新合資組織が形成されて、幼児・青少年を含めて約二千五百名の住民のための施設が実際に運用されたのは、一八一六年一月のことであった。

### 『新社会観』

ところで、オウエンはかねてより、助教法を考案したベルやランカスターに賛同し、献金などもしていたが、ランカスターのスコットランド訪問のさい（一八一二年）、かれは観迎会の

司会をひきうけた。かれはその席で、貧民子弟のためのランカスター・システムの支持と拡張をうたう。善悪、幸、不幸のみなものは教育であり、それゆえ幼少期からの教育の社会的意義を強調している。また単なる読み、書き、算よりも、子弟の従順さなどの習慣づけを重要視している。ここにはすでに幼児教育への着目があり、貧民階級間の訓練と教育の結合方式が社会にとっても有益なことの示唆がある。

このランカスター観迎会が機縁となってまとめられた『新社会観』（第一、二論文一八一二年末、第三、四論文一八一三年初め出版）には、児童教育、労働者の状態改善の原理にもとづく工場経営の理論的方向づけと実践について説明を加えつつ、性格形成に関する理論が展開されている。この『新社会観』は、かれの教育の思想を端的に表わしていると考えられる。またかれの教育思想の生涯的な全体像を表わし、「新学院」の発想がもられていると考えられるので、内容をやくやくしく紹介してみたい。

第一論文では、適当な手段を用いれば、どのような性格でも一般に付与できるという原理によって、国民の性格の一般的形成と教育のために合理的な計画をたてることを、国の統治者に対して要求している。つまり、子どもたちを幼年時代からよい

習慣に仕込み、合理的に教育し、労働を有効にし、青年から老年期にわたって心身の健康を増進することによって幸福を増進するような国家的措置を講ずるように要請している。

第二論文前半では、この性格形成論の諸利益についてのべている。つまり、幼年期からこの原理によって教育された子どもは、性格形成論への洞察によって教仲間<sup>せんご</sup>の意見や習慣の理由を見きわめ、個人的な不快や公的な敬意を生ずべき根拠を失い、他人に対して正当な斟酌<sup>んしやく</sup>の感動をもつようになり、思いやりさえもつようになる。子どもは例外なく受動的で、無限な多様性をもつ可塑的な複合体である。したがって的確な注意を払いつつ、賢明な管理が必要である。しかし現状は幼年期から犯罪を教えられ、野放しにされているのである。

第二論文後半において、ニュー・ラナークでの実践に言及している。デールの慈善的な功績をたたえながらも、上述のように失敗の原因を分析している。さらにオウエンは村の不正、犯罪などの抑制策、予防策について、その成功をもうらしているが、とりわけ注目すべきことは、子弟の教育が村人の生活改善と歩調をあわせてはかられることである。

ニュー・ラナークの実践は、オウエンの考えによれば、合理的な訓練と仕事の計画なのである。貧しいもの、無知なもの、

教育や訓練を受けてこなかったもの、拙悪な教育や訓練を受けたものなどに対する、訓練と管理における改革である。したがってこの計画は、下層階級の性格形成と一般的改善のための、国民的な排他的でない制度を提出するための、平明で簡単に実行可能な計画である。合理的な訓練と仕事の計画とは、具体的には性格形成のための国民的制度と、政府による過剰な労働人口に対する仕事の準備にはかならない。しかも性格形成のための国民的制度計画は、あらゆる近代的な教育改善を含み、国内の何びとの子弟をも排除すべきものではないのである。オウエンはこうした合理的訓練と仕事のための立法的処置を政府に訴えるのである。

『新社会観』第三論文において、オウエンはニュー・ラナークの主要事業としての「新学院」について説明を加えている。これは、ニュー・ラ・ナーク訪問者の注目的であって、村人の性格改善・形成のための優良な環境設定であった。満一歳あるいは歩行不能な子どもから村の青年、成人まですべての村人が収容対象である。オウエンの構想によると、一―三歳、三―五歳（この二組が幼児学校）、五―十歳（小学校）、さらに十―二十、二十五歳（青年および成人学校）の三階梯の学校である。幼児学校では幼児に遊びが保障される。小学校では、読み、書

き、算、理解、軍事訓練<sup>(2)</sup>が教育され、女兒にはとくに、裁断、仕立て、料理が無料で教えられる。青年・成人学校は、工場で働く労働者の夜間教育施設であつた。

「新学院」では、無叱責、無懲罰であり、個人的な不正はない。子どもは不断に親切に扱われ、授業は親しみやすく合理的なやり方で教えられ、うちとけた対話が重視される。事実の知識が優先され、実物教授が重んぜられる。教材は親しみのあるものから有用、必要な事項へと進むのである。説明は子どもが発達につれてなされるべきである。また屋内、屋外、の教育は調和的になされ、できるかぎり戸外に出て、庭園、果樹園など自然の知識に親しませる。

学院では、子どもたちの幸福に寄与しようという意見と習慣だけを与える。したがって「仲間をそこなうようなことをしてはならない、仲間の幸福のために全力を尽す」という教訓、原理にもとづいて行動するような習慣を獲得させることが教師の第一の任務といつて過言でない。教師はあらゆる機会をとらえて、各人と他人との利益と幸福の関係を強調することが大切であり、いつてしまえば、これが教育の初めであり、終りである。このとき重視されるのは幼児の合理的な性格形成である。それは容易で確実であり、個人・社会に有益である。ここに幼児学

校設置の意義がある。同時に重視されるのが誤つた教育を受けた青年や村人たちに対する教育である。というのも、子どもを正しく訓練するためには、子どもをとりまいてる人びとが前もつてよく教育されていることが不可欠であるからである。それで村人たちからの善悪の除去と矯正のために、夜間講義が開かれる。冬の間は、週三晩、夜間講義とダンスとが交互に開かれる。そのときの講義の内容は、子どもたちを合理的人間たらしめる正しい教育方法、自分たちの勤労の収入を有益に費やす方法、およびかれらの手に残る収入の剰余を充用して基金をつくる方法などについてである。これらは価値のある知識であり、平明で印象的な言葉でもつて楽しく愉快な方法で講義されるべきである。今日でいえば、社会教育、成人講座とでもいふべきものである。

第四論文はオウエンの原理の政治への応用を扱っている。現行の犯罪を生みだし、とくに貧民の知的・公的悲惨のもとになっている諸法律さらに救貧法の廃止、修正、国教会の教養ないし宣誓の撤廃などという国家規模の改革を要求している。オウエンはそこで犯罪予防をよび人間性格形成のための制度を要求する。そしてこの国家を構成する個々人の性格形成は国家の最大関心事であり、安全、簡易、有効、経済的な統治手段であつ



て、訓練・教育の国民教育制度がのぞまれるゆえんである。最近の貧民の国民的教育はベル、ランカスター、ホワイトブレッドなどによって手がけられているが、不十分であり、教育理論・方法ともにふさわしい貧民のための排他的でない国民教育制度が要請される。この国民的教育訓練の真髄は、個人と国家の将来の幸福に寄与する観念と習慣を青年にうえつけることであり、青年を合理的人間へと教育し、有用な訓練および合理的な性格形成をはかることにあるのである。労働階級の訓練および教育は国民教育制度の整備によってなされるのだが、そのさい次のような法令が不可欠である。つまり①教育制度の適任指導者の任命、②教員養成所の設立、③全土の学校設置、④学校建設・維持のための経費調達、⑤最善の指導方法の計画、⑥適任教師の任命、⑦心身教育の内容、などの施策のための法令である。

さらに、国民教育制度とならんで国家の施策として要請されるのは、労働政策である。国家は失業者の労働利用をあやまっていることについて、労働の価値と需要とに関する定期かつ正確な情報を提供する必要がある。あるいは全球職者に対しての雇用を保障すること、国民的効用をもつ恒久的な仕事の準備が政府の第一の義務である。怠惰な貧民の存在理由を考えるなら

ば、賢明で適切な法律と訓練が必要である。もしも貧困・下層階級の教育および訓練のための国民的制度が効果的になされるならば、かれらはやがてみな自活に足る仕事を発見できるようになるからである。

以上、オウエンの名著『新社会観』を構成している四論文をややくわしく紹介した。ここにもられた思想は、かれの生涯的な背骨をなすものであり、次回でとりあげようとするニュー・ラナーク村の実践目標であったのである。そしてとくに教育の思想は、「新性格形成学院」の実践へと結晶されていくのである。そして何よりも、過重労働、低賃金、児童・婦人労働に象徴される、産業革命の進行に対するオウエンのたたかひの開始である。(次回につづく)

注

(1)英国最初の夜学校と評価する人もいる。

(2)正しい実施によって、健康、注意力、敏速、秩序などの習慣が形成される。